

乳井貢の『大学』解釈について

著者	楊 世帆
雑誌名	東北文化研究室紀要
巻	62
ページ	15-26
発行年	2021-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00131253

東北文化研究室紀要通巻第62集別冊（令和3年3月）

乳井貢の『大学』解釈について

楊 世 帆

乳井貢の『大学』解釈について

楊世帆

はじめに

乳井貢（1712－1792年）は、陸奥弘前藩の藩士である。宝暦三年（1753年）に弘前藩の勘定奉公に登用され、思い切った財政改革を断行し、めざましい成果をあげた。宝暦五年（1755年）、奥羽地方が凶作によって大飢饉に襲われたが、乳井貢の対応のおかげで、津軽領内において餓死する人は一人も出なかったと伝えられている。宝暦六年（1756年）には、凶作の年に年貢徴収の功で藩主津軽信寧に「貢」の名を賜られた。しかし、急進的な財政改革によって、彼は敵対者の恨みを買った。それもあって、宝暦八年（1758年）に乳井は失脚することになる。その後、安永七年（1778年）、乳井は改めて勘定奉行に任命されたが、再び抵抗に遭い、二年後には再度蟄居を命ぜられる。このような生涯を送った乳井貢は『志学幼辨』十巻をはじめ、儒学、農学、算学などの分野のたくさんの著作を残したことも知られている¹。

乳井貢は主に地方史、あるいは経済史の視角で研究されることはあるといっても、全体的に彼についての研究は非常に少ないといえる。とりわけ、思想史において乳井貢に注目した研究は、稀に見えるといって差し支えないのではなかろうか。いま乳井貢の思想に対する先学の言及を挙げてみると、まず1941年に藤井正次氏は三本の論文を書き、初めて乳井貢の思想の特徴を紹介した²。しかし、藤井氏が論文を掲載したのは、全て青森県の地方雑誌であり、全国的にそれほど大きな影響力を持ち得なかった。それは藤井氏の後に、乳井貢の思想があまり学術界の注目を集めなかったことから推測される。その後、1988年になると、小島康敬氏によって乳井貢の思想はあらためて発見された。小島氏はそれから数本の論文を出して、乳井貢の思想を論述している³。管見の限り、思想史における乳井貢の姿を考察した研究は以上の数本しかない。

さて、藤井・小島両氏は様々な視点から、乳井貢の思想の特徴を論述した。両氏の研究によると、乳井貢は古学派、特に山鹿素行、荻生徂徠、太宰春台の影響を受け、個人心性の修養に主眼を置く朱子学を批判して、政治実務に実用的な学問を主張した。そのほか、老荘思想の影響も大きく、「至誠無為」を唱えたことも指摘されている。

しかし、政治家でありながら儒者を自認した乳井貢は、儒教の「経典」に対して、いかなる認識を持つのか。それについて、まだ十分に検討されていない。乳井貢は、儒教の経典に対して度々独特な理解を見せた。特に、彼は『大学』に対して、『大学文盲解』という解釈書を著し、朱子学と対蹠的な『大学』解釈を示した。

周知のように、朱子学において『大学』は、個人の心性修養から出発し、天下国家を治めるまでの経路を描く書物である。しかし、前述のように、乳井貢は、政治的な実用性を重視する姿勢

を取り、個人の心性に主眼を置く学問を厳しく批判している。そのために、乳井貢は、心性修養の学問としての『大学』を拒絶し、実用の立場から『大学』の内容を再解釈している。それでは、乳井貢はいかなる論理でもって、政治的に実用な学問としての『大学』を築き上げるのであろうか。

また、江戸時代において、乳井貢以前に、既に『大学』は多様に再解釈されていた。乳井貢の『大学』理解は、単なる個人の思想的性格の産物ではなく、同時代における共通の問題意識に基づいて作り上げられたものであると考えられる。それでは、江戸時代の『大学』受容史において、乳井貢の『大学』理解には、いかなる影響を認めることができ、またどのような時代意識の下で提示されたのであろうか。

さらに、乳井貢は『大学』への再解釈を通して、いかなる思想を構築するつもりであったのであろうか。

これらの問題をめぐって、本稿は『大学文盲解』を考察し、乳井貢の『大学』解釈の性格を分析しつつ、江戸時代の『大学』受容史における乳井貢の価値と位置付けを明らかにすることを試みる。

一、『大学文盲解』の特徴

周知のように、『大学』というテキストは、もともと『礼記』の一節であったが、南宋の朱熹に抽出され、『論語』『孟子』『中庸』と並列して『四書』と規定された。朱熹によれば、『大学』は「経一章」と「伝十章」に分かれている。「経一章」は、学問の三綱領（明明徳、親民、止於至善）と「八条目」（格物、致知、誠意、正心、修身、齐家、治国、平天下）を提示している。「伝十章」はこの八条目に対する解釈である。ただ、『大学』原文の「伝十章」には、「格物、致知」についての二条への解釈が欠けている。朱熹はその部分を補うために、「格致補伝」という一文を著した。

乳井貢の『大学文盲解』も「経一章」と「伝十章」の分け方に従って、上下二巻に分かれる。上巻では「経一章」を句ごとに解釈している。しかし「伝十章」については、朱熹の「格致補伝」だけではなく、「誠意、正心、修身」の部分を全て省略し、直接「齐家」の部分から解釈を展開する。

乳井貢は「格致補伝」を省略したといったが、『大学』の原文を取り上げる際、朱熹の手が加えられたテキストを使った。乳井の時代において、王陽明によって説かれた古本『大学』はすでに広く日本の儒者に読まれた。乳井に大きな影響を与えた荻生徂徠も、王陽明の古本『大学』を使い、『礼記』に復帰して『大学』を理解することを説いている。

それに対して、乳井貢は反朱子学の学問姿勢を取ったが、朱熹の『大学』テキストを取り上げた⁴。また、『大学』テキストを尊崇、伝播することで、朱熹、程頤の功績を大いに称賛する。

「古への学者は其経を信ずること如此、其厚哉。朱程の功、日本迄至て其名を成す。謂つべし君子なりと、是本家餅屋の餅。此兩人なくんば、其枉を左にせん。此人達の御影を以て唐の辞使ひも覚へ、日本に於ても此兩人の上を超へたる君子も両三人出て、餅屋の餅より能き餅を発見せられ、其店の看板を別に出されたるも本は是朱程両君子の大恩なり。」⁵

朱熹と程頤を餅屋の本家に喩え、後に本家より良い餅を作り出しても、本家の大恩を忘れてはいけなと説いている。この比喩を通して、日本における『大学』の解釈は既に朱熹と程頤を超えた述べながら、朱程の功績を称えることを忘れてはいけなと説いている。また、乳井の『大学』解釈は朱程と完全に異なっていると考えられる。

乳井によれば、『大学』とは、一般人の心性修養ではなく、君主が学ぶところの天下を治める学問である。

「学に大の字を付たるは四海を平らかにする治道を教ゆる条目なれば、天子諸大名之常に身をはなさぬ学なる故。大の字を付たる者ならん。然るときは文官武官共に凡て国政に興程の大臣は皆学ぶべき大経なり。平士足輕小人の常に見て何んの益に立ぬ書物なり。」⁶

『大学』は国家を治める方法を説く学問であり、被治者の者が読んでも役立たないと主張する。また「大学の道」とは、聖人が民のために暗い世界に開拓した道路であると説いている。

「此故に古の聖智、天地を俯仰し、則て其道を作り、橋を懸、船を浮め、棧を渡し、險を穿、追分に札を立て、東へ往けば大河有り、西に往けば險難有り、爰にては馬に乗るべしと、彼にては駕籠に乗るべしと。人民一生の道中記を書いて其道を教へたる故大学の道と云、即是人君の道中記と知るべし。」⁷

ここでは『大学』を君主の道中記と定義した上で、個人の心性を修養する学問より、政治の面で、『大学』の意義を称える。このような論説を通して、乳井貢は独特な『大学』理解を示した。

総じて言えば、乳井貢は『大学』の価値を認めながら、『大学』を尊崇、伝播する朱熹、程頤の功績を称賛した。そして、『大学』を解釈する際に、彼はテキストを逐語的に詳しく考証、注釈せずに、『大学』の主旨や大意を説明する。朱子学と異なって、心性修養の学問としてではなく、政治的方法としての『大学』の意義を説いている。

二、三綱領と八条目

それでは、乳井貢はいかなるテキスト解釈を通して、為政者の道中記としての『大学』理解を構築したのであろうか。それを明らかにするために、『大学』の三綱領と八条目に対する乳井の再解釈を考察することを試みる。

さて、朱子学において、明德は天に授けられる明らかなる性であり、「明明徳」とはその本性に回復することである。それに対して、乳井は「明」と「徳」を分けて解釈している。まず「明」とは、君主が事物の法則やその特徴を理解することであった。

「夫水は水と見、火は火と見、赤を赤と見、馬は牛にあらず、鼠は猫にあらずと照らすは誠に明

なり…故に馬に鼠を取らせず、猫に荷を附ず、小人に政を取らせず、君子に草履を取らせず。」⁸
また「徳」は「得」と解釈され、事物の特徴を明らかにした上で、具体的な現実を活用することであると説かれている。

「明と徳とは一体二用なり、明に依て徳が出る、徳に依て明を著す者なり…故に徳は得なりと孔子も仰なり。得（とく）は唐の音なり、日本にては得（うる）の音なり。其道筋を己に得て自在の動きを以て変化に応じ、用を成し、功を執る者は是徳なり。」⁹

すなわち、乳井の考えでは、明德とは、世の中の事物の道筋を理解した上で、現実に応じて活用し、実用に生かして功績をあげることである。このような論理を通して、明德の意義を心性修養から政治実践に転回させた。

また、「親民」の解釈について、従来、朱熹と王陽明をはじめ、「新民」と「親民」の二種類の釈があった。乳井貢はある折衷的な姿勢をとって、「新民」と「親民」を再解釈している。

「民を親んずるに在りとは、上と下と喧嘩をせぬことなり…聖君是を見、大恥之つかみ上と思召、其風俗を化して正しきに改むるを民を新にすると云。故に湯の桀を改め、周の紂を改むる是なり。其是を改むに及て、民其上に親まず上を怨み侮り、常喧嘩に而何を以て其教に従はしめんや…然れば民親て而して後に民新なるべし。」¹⁰

君主が民と親しみ、さらに民の風俗を改めることを説いて、政治の面で「新民」と「親民」を折衷している。

さらに、「止於至善」も君主の善と解釈される。

「堯舜は罪を民に譲らず、不善を己に顧る。然とも民是を愚鈍者と侮らず、却て恐れて親しみ萬世の今迄明君と奉称なり。是至善に止まればなり。故に聖人にして自から聖人たることを知らず、其善の究なきことを知んぬべし。其究なき所に止まる。是を至善に止ると云。」¹¹

「止於至善」は、君主が永遠に驕らず、極まらない所に止まると説かれている。このような説を通して、「三綱領」を政治方法と解釈している。

また、朱子学において、八条目は個人修養から国家社会へ影響する経路である。「格物、致知、誠意、正心、修身」は個人の心性修養の段階であり、「齐家、治国、平天下」とは、個人の修身から他人へ影響することである。

それに対して、乳井によれば、八条目が前後一貫するものであり、段階に分けて理解してはいけないものである。

「然るを今の学者は身を修め切りて、椽の下にじつと隠れて居れば、翌日より東の家から齊て、北の方の国が治まり天下は二日目の午の初刻何ん十何ん分に急度平かに成る者と覺へ、是を自然を待の誠意正心と悟て死ぬ迄守り詰て待て居なり。身の修り切たる君子たつた一人椽の下に居て天下平かになると見る心より八つに割り其一つ一つを仕切して、極め札印可目録の理屈にする學術なり。」¹²

八条目を分けて、修身を完成した君子が居れば、天下国家が自ずから治まるという論理を厳しく批判する。修身ばかり唱え、政治実務を疎かにする学風を批判する乳井の立場を現している。

乳井によれば、「格物、致知、誠意、正心、修身」の条目も単なる道徳的な修養ではなく、むしろ政治能力の育成であると考えられる。

朱子学において、「格物」とは事物の理を極めることである。また朱子学の「理」とは、自然に存在する法則であり、道徳的準則の意味もある。それに対して、乳井貢の考えでは、「格物」は為政者が天地自然の法則を理解することである。

「故に天地も是物なり鬼神も是物たり、是を以古の聖智仰で象を天物観俯して、法を地物に観ると云は、即是物を格するに在りと云は是なり。」¹³

「天地の間に物有て用有り、用有て事有り。今日只今止て置れぬ用事、皆物の為に動かずと云時なし。其動きの道を知ることは古より経になし。故に易に曰、書は言を盡さず、言は意を盡さずとばかり有り。又曰く変化の道を知る者は神の為所を知るとのみ有り。其是を知るには天地を師とし、万物を書物とし、経書を鏡とし、物を以て見る所無教無学の始めに復すことならず。見聞に就て耳目に順ひ、流れ川棒で打つの学問にては、治国平天下にする事叶はず、乱国変天下にする外其為所を知らず。」¹⁴

ここにおいて、乳井が特に提示しているのは、治国平天下に役たつ「格物致知」は単なる耳目の感知によって、書物を通じ事物を感知することではなく、既成の言語や書物を超え、無教無学の始めに戻って、直接に事物の実態を認知しなければならないという考えである。

また、この「格物致知」と接続して、「誠意」の誠も「あきらか」と訓読する。そして、理解、認知するというように解釈している。

「此故に誠を明とも訓、明を誠とも訓て、兄弟の親みを成すなり。此至明を見て知るに至るには、今日只今為所の事物を格して、法則玄妙の備はる者を察て始めて精義神に入る。是を知に至ると云。其知に至る故、其為んとする意も其道筋誠（あきらか）に成る積りなり。其意明らかならば、邪の道筋へ入る心がなくなる筈なり。是を身を修むと云。」¹⁵

事物における玄妙な法則を観察し、行為の道筋を明らかにすれば、自ずから邪な道に入る心はな

くなる。一連して「格物、致知、誠意、正心、修身」は、為政のために、事物の法則・道筋を明らかにすることであると説いている。こうした「八条目」は完全に一貫した政治行為として解釈された。

三、認識論としての『大学』

上述のように、乳井貢は、『大学』の主旨が個人の心性修養ではなく、為政者が現実に即して、事物の実態、道筋を認識し、政治の実務に応じて、適切な対応をすることであると主張する。

それでは、このような現実認識に主眼をおく『大学』理解は、いかなる問題意識に基づいて生まれたのであろうか。筆者の考えでは、乳井貢の『大学』解釈の行き方は、江戸時代において、朱子学の「理」「性」の意義の変容と関わっている。

周知のように、朱子学の論理には、天地万物の存在・運行はすべて「理」に統括される。また『大学』における「明德」とは、人間の善なる「本然の性」であり、超越的な「理」から由来する。それ故、「格物窮理」を通して、善なる本性に復帰すれば、一般人も道徳的に完璧な聖人になることができる。かかる論理を通じて、心性論としての『大学』解釈が築き上げられる¹⁶。

しかし、江戸時代において、朱子学における超越的な「理」は既に数多くの儒者が批判するところであった。例えば、山鹿素行は「理」が「性」や「天」と関わらず、事物の個別的な「条理」として説く。荻生徂徠も「理」は個別な事物の法則であり、「理」を窮めることによって世界の全体を理解することはできないと論じた。

「条理ある、これを理と謂ふ。事物の間、必ず条理有り。条理案るときは則ち先後本末正しからず。性及び天皆な理と訓す、尤も差謬せり。」¹⁷

「それ理なる者は事物にみなこれあり。故に理なる者は纖細なる者なり。宋儒の意、謂へらく、その細を合せば以てその大を成すべしと。あにそれ然らんや。」¹⁸

超越的、天地万物を統括する「理」を批判することに従って、人間の「本然の性」も存立できなくなると考えられた。実際、素行や徂徠はともに、「本然の性」を拒絶して、「気質の性」のみを認めていた。

「本然の性を認めんと欲するは、是れ異端の教なり。」¹⁹

「性なる者は、生の質なり。宋儒のいはゆる気質なる者なり。」²⁰

乳井貢もこのような発想を継承して、一般人が「本然の性」に復帰することを通して、聖人になる論理を猛烈に批判する。

「気質ノ性ヲ措レ本然ノ性ヲノミ論スル。是レ即心學理學ノ費也。此故ニ學テ気質ヲ變ス

ルト云コトヲモ庸人ハ聖人ニ變スル者ト誤ル也。」²¹

したがって、朱熹の『大学章句』に描かれた「格物窮理」を通して、本性を明らかにする論理はもはや存立できなくなる。しかし、心性の学問としての『大学』を拒否するのと同時に、新しい方向で『大学』を解釈する必要がある。それ故、素行、徂徠や乳井はそれぞれの立場から、『大学』への再解釈を展開したと言える²²。

また、朱子学における世間万物の存在、運行を統括する「理」に対して、乳井貢は、「理」とは固定的なものではなく、具体的な事物に応じて変化しているものであると説いている。

「然るを事を闇て先つ其理を辨し而して其事を為んと欲するは是に似て非也。いかんとなれば、理は事を盡すの間に於て適也。故に事より前の理は皆應せずして廢る。是空理也。惟精惟一に向て事を盡す。何そ別に事の前に其利を辨し得へけんや。事の前に理を辨するは正理の謂ならず。」²³

「夫れ唯事を精一に盡す間に於て、其理竟に事に随ひ變化に應する者也。」²⁴

乳井において、現実の実態は固定的な理（すなわち、法則）にまとめることができない。それ故、彼の論理においては、「理」によって現実を認識することは実現できないものと考えられる。実際、乳井貢の考えをみると、世界の実態はかなり理解しにくい「闇」としての存在であった。『大学文盲解』において、「闇の夜」「昧い道」としての世界が繰り返して説かれている。

「明德を明らかにするとは、闇にして行く向見へぬ道を無法やたらに心拍子の我慢を以て往くべからず。前々より所持の挑灯へ蠟燭を立て、用意の焼松を灯し、東西を定め案内者に道筋を聞き、淵瀬橋船能く見て往けと云ことを明らかにすと云なり。明德は即ち兼て所持の挑灯のことを云なり。」²⁵

「此故に物を格して見ねば、其動の順道明かならず、明らかならねば危し。危き時は大勇の士も心決すること能はず、是に於て臆病となるなり。白晝には四つ五つの子供も原野に遊ぶ者は明らかなればなり。闇の夜に知らぬ山路を往時は大勇も恐るるは其道昧ければなり。聖知の天下を平にする道、錢一文も入らず、飴で餅喰ふより安きことを教へたる者なり。」²⁶

それでは、固定的な法則がなく、真っ暗な夜のような現実に直面した人間社会は、いかなる規範にしたがって運行しなければならないのであろうか。この問題に対して、乳井貢は『大学』とは真っ暗な現実において、聖人に開拓される道であると主張する。「格物致知」を通じ、挑灯としての「明德」を持って、現実の実態や道筋を理解した上で、政治的作為を行うことを説く。

総じて言えば、乳井貢が生きる時代において、朱子学における超越的な「理」や「本然の性」の概念は多数の儒者に批判されていた。したがって、「格物致知」を通して、「本性」に戻るとい

う心性学問としての『大学』解釈は既に破綻をきたしていたと考えられる。そのため、当時の学者にとって、『大学』を再解釈するということが新たな課題になっていたのであった。

乳井貢はかかる課題に直面して、『大学』の主旨が政治実務のために客観的な事物の実態を認識することであると主張し、『大学』に新たな意義を与えたと言える。

四、認識主体への要求

前述のように、乳井貢は現実認識をめぐって、政治的な実用の学問としての『大学』を説く。それでは、乳井の思想において、『大学』は果たして個人的価値の実現と関わることなく、単純な政治のための学問にすぎないのだろうか。あらかじめ答えを述べておくと、そうではなかった。すなわち乳井貢の思想の中で、個人の価値を実現することは現実認識と深く関わっているのである。

小島康敬氏が論じたように、乳井貢の論理では、個人の価値は能動的に「天職」に尽くして、国家社会に対する「用」を果たすことに見出される。また「用」に立つには「形」、「名」を超えて、事物の実態を認識しなければならない²⁷。

乳井貢が『大学』の価値を論ずる時も、特に現在において実用することを重視する。

「孔子は三綱領八条目と仰られねども、是は名にて其实は一つ事なれば、文字論と名争ひをして日を暮し、今日唯今の入用を知ることを第一とすべし、左様致さねば萬々年を経ても世の用に立つ期なしと知るべし。世の中の玩物にするならば、近松門左衛門が浄瑠璃本を見るが其功大学に過ぎたり、唯読て斗り拝で斗り居る者なれば、其用観音經に劣れり。」²⁸

文字、名義の考証に夢中して、実用を疎かにする学風を批判して、「今日唯今」の用に立たなければ、『大学』の価値が失われると説く。『大学文盲解』に度々説かれた現実認識のことも、「実用」のためであると考えられる。

それでは乳井貢にとって、個人として、いかに「現実認識」を実現して、「用」に立てるのであろうか。前述のように、乳井の認識論は、「形」「名」を超えて、事物の「実」を知ることを要求する。それゆえ、「現実認識」を実現する方法を明らかにするために、あらためて彼の論理の中で「形」「名」「実」の意義を考察する必要があるだろう。

まず、乳井貢の思想における「名」「形」の概念は『老子』に由来している。

「故ニ老子曰、無名天地之始有名万物ノ母。故常無欲以觀其妙、常有欲以觀其徼ト云々。是レ万物無ヨリ生シテ無ニ帰ラスト云者ナシ。無ハ形ナシ、形ノナキ初ハ名モナシ。唯一ニシテ天地ノ根タリ、衆妙変化是ヨリ出テテ已ニ形ヲ顯レス、是ヲ有ト云。」²⁹

乳井は『老子』の言葉を引いて、「有無」に対する自分の理解を述べる。彼の世界観においては、

世界の万事万物は最初に混沌しており、分けられた「形」と「名」は存在しない。具体的な「形」に分けられた後で「名」が付けられる。そして、その「形」「名」を通して、人間は実なる世界を認識できるようになる。

「夫レ教ハ「名」ト「形」トノ外ナシ。故ニ聖人ハ名教ヲ貴フ。名ハ形ノ聲也。先ツ呼テ人ノ耳ヲ導キ是ニ向ハシム者ハ名ノ徳ナリ。而シテ其形ヲ指斥テ人ノ目ヲ導ク者ハ形ノ徳ナリ。名形二ツノ者ヲ以テ人ノ耳目ヲ導キ、而シテ後ニ其用ノ実ヲ曉サシム。其实ハ本ヨリ形ナシ故ニ実ニ至テハ聴クコト能ワス、視ルコト能ワス、耳目ノイカントモスルコト能ワサル者也。」³⁰

ここでもまた、世界の実像は「無形」「無名」であるために、直接に認識することができないと説いている。それ故、聖人は名と形をもって、実なる世界像を一般人に教えることになる。しかし、人が名と形を求めるに連れて、「名」と「形」はますます繁多になっていく。したがって、人がだんだん名と形に迷うようになり、実を求めることを忘れてしまう。

「故ニ老子言、心ハ有形有名生々シテ究リナキヲ耳ニ従ヒ、目ニ従ヒ、形ヲ尋ネ、名ヲ追ヒ往クトキハ、其本ニ帰ル道ヲ失ヒ、末ヲ追ヒ、物ニ引レ其形彌多ク其名益繁ク、殆ント放心スル所ヲ自知ラス。惑ヲ以テ是ヲ悟レリト究ム。是此ノ悟唯形ト名ノミニシテ害ナシ。故ニ用イルニ及テ分厘モ変化ニ応スル妙ヲ知ルコトナシ。夫レ事物ノ学ハ天地ノ間人世ノ功用ヲ為ヲ貴フ。然リヲ学テ人世ノ用ニ立サルトキハ聖教ニアラス。故ニ学ハ唯其实ヲ得ルマテ也。」³¹

乳井の考えでは、「名」と「形」は世界の「実」を人々に伝える効用を持っているものの、人間が固定化された「名」、「形」に拘ってしまうと、逆にその背後にある豊富な世界の実像を簡単に看過しまい、事物の変化に対応することができなくなる³²。

それでは、乳井貢はいかに「名」「形」を超えて、「実」を知るのでしょうか。彼は「火」を例にあげ、事物の実態を認識する方法を説いている。

「夫レ火ハ用ノ名也。焰ハ形ノ名也。熱ハ実ヲ指シテノ名也。火ト云テ、用ヲ示シ、焰ト云テ其形ヲ見セシメ、熱ト云テ其实アルコトヲ聴カシム。是レ名ノミニ形ノミ、聖人ノ教ル所ハ是マテニシテ、其熱実ニ至テハ言ヲ以テ傳ハカタク、問ヲ以テ授カタシ。学者是ニ於テ聖人モナク、師モナク、教モナク、導キモナキ場ニ至ル。此時ニ當テ耳目視聴ノ及フ所ニアラス。自ラ手ヲ焰ニ入レテ熱実ノ味ヒ始テ心ニ徹底シテ覚ユ。是ヲ実ヲ知ルト云。」³³

これを見ると、「火」「焰」「熱」は事物の一面的な「名」である。既成な「名」を通して伝達できるのは他人に教えられる観念的な知識である。「火」という実物への認識を達成するために、

実際に手を火に入れて、身体感覚を通して、徹底的に「火」を実感しなければならない。すなわち、「名」を超えて現実の実態を認識するために、他人から教えられる観念的な知識だけではなく、本人の実践によって、身体で事物を実感しなければならない。

乳井貢の論理において、具体的な現実事物の実態に対して「理」「形」「名」などの既成概念は、あまりに抽象的で固定的なものである。既成概念が伝えるのは単なる他人から教えられた観念的な知識に過ぎず、概念ばかりに従えば逆に事物の実態が見えなくなる。そのために、乳井貢は、聖人や他人に教えられた「形」「名」などの抽象的概念を超えて、本人の実践を通して、すなわち身体感覚で具体的な現実を実感しなければならないと説く。

また、かかる認識論は、改革という彼の主張とも関わっていると考えられる。乳井貢にとって、既成の知識、制度を超えて、個人の実践を通して、合理的に事物の実態を認識するという主張は、まさに政治改革の論理的基礎になっている。

「故ニ今ノ學者ノ理トスル所ハ假令ハ物ヲ水ニ投スルトキハ、其輕キハ浮ミ、其重キハ沈ムト云ノ聖語ヲ聞ケハ、是レ天理ノ自然、萬代不易ノ格言也ト尊信シテ、天下ノ物皆輕キハ浮ミ、其重キハ沈ムニ決定シ、全ク外ヲ云コトヲ恐ル。夫レ針ト大木トハ孰レカ輕ク孰レカ重キソ。針ハ大木ヨリ輕ケレドモ沈ミ、大木ハ針ヨリ重ケレトモ浮ム。然レハ浮沈ハ物ニ在テ輕重ニアラス。是レ名ノミヲ信スル誤也…此故ニ今ノ學ハ名ト形ノミヲ信用シテ、其實ヲ察スルコトヲセス。故ニ學フトイヘトモ、今國家ニ用ルニ及テハ一向ニ用ニ立タスシテ、務ル所ハ皆庸俗ノ所爲ヲ取り、財金聚斂利得ノ務メヲ借り、以テ治道也古道也ト信シ學フ所ノ聖法ヲハ人世ノ別段トスルノ大誤ヲ生ス。是レ皆聖人ヲ敬スルニ過ル故也。」³⁴

乳井貢によれば、当時の学者は、事物の「形」「名」など固定的、既成の知識、法則ばかりにしたがっているため、現実の実態を理解できていない。故に、昔の政治作法を固守することになり、現実の状況に応じて、臨機応変に適切な対応を取ることができない。それに対して、乳井は、固定的な法則に一切拘らずに、事物の「実」を把握した上で、具体的な現実状況に応じて、能動的に適切な対応を取ることが唱えている。

総じて言えば、乳井貢は心性学問としての『大学』を斥けた。そして『大学』の主旨が、現実を認識した上で実用に立つことであると論じた。また乳井の論理において、認識論としての『大学』は、個人価値の実現と深く関わっていた。彼は、個人の心性の純粹化を通して聖人になるという倫理の実現に関する価値を否定したが、社会における役割を持つ個人の価値を説いている。人間が事物の実態を認識した上で、それを現実政治の実務に活用して、国家社会に「用」を立つことを述べている。また、「用」を実現するために、人が既成の知識や観念を捨てて、身体の実践を通して、「名」「形」を超え、能動的に事物の「実」を実感することを要求する。かかる論理によって、心性の修養を離れ、現実認識を中心にし、あらためて個人の価値を実現する経路を描き上げるのであった。

終わりに

乳井貢の時代において、朱子学の基本概念としての「理」「性」などは既に多数の儒者が問い直していたものだった。理が世界の存在や運行を統括する「原理」ではなく、むしろ個別な事物の法則としての「条理」であると説かれていた。したがって、「天理」に由来した「本然の性」も存立することはできず、具体的な人間の実情としての「気質の性」しか存在しないという論理も唱えられる。

「理気論」「心性論」を批判はすることでまた、朱子学の経典注釈も成立しえなくなる。したがって、儒教の経書を再解釈することが当時の学者にとって大きな課題になった。

乳井はこの課題に直面して、『大学』の核心概念（三綱領、八条目）を再解釈することを通して、独特な『大学』理解を築き上げた。乳井貢は、「修己」から「治人」への経路としての『大学』解釈を斥ける一方で、『大学』の主旨は、具体的な実物に即して現実の実態を理解し、実務を果たすことにあると主張する。さらに、心性を純化して聖人になるという倫理上の価値実現を批判して、個人の価値は、既成の概念や知識を超えた能動的な実践による事物の「実」の把握の上で、国家社会に対して「用」に立つことであると説く。

乳井貢は『大学』を解釈する際に、テキストの版本を弁別せず、また文字を考証せず、強引に解釈している箇所が多数ある。故に儒教の経学の視点から見れば、『大学文盲解』は非常に疎かな文章であるかもしれない。しかしかかる性格は、儒教の経典に対する乳井貢の姿勢を如実に示していると考えられる。すなわち、乳井貢にとって、「聖典」としての経書を本来の意義、様子に戻って理解することよりも、むしろ経書を思想的資源として自己のやり方で解釈するほうがより重要である。

乳井貢は儒者でありながら、政治家、改革者でもある。多面的な性格は彼に独特な視点を与えた。朱子学の経書解釈の破綻に伴い、乳井は現実認識と政治的実用の方向で『大学』を新たに読み直したのであった。彼の解釈は必ずしも『大学』の原意に合うわけではないが、当時の時代状況を踏まえれば、『大学』に新しい生命力を与える営みであったと言える。

- ¹ 乳井貢の生涯について、『新編弘前市史 資料編2 近世篇1』、714-719頁（弘前市企画部出版、2005年）を参考にした。
- ² 藤井正次、「乳井貢の哲学的世界観」（『うとう』26号、1941年10月）藤井正次、「乳井貢の思想史的位置」（『月刊東奥』、1941年16年8月）藤井正次、「学問の有用性と実戦性」（『月刊東奥』、1941年9月）
- ³ 小島康敬、「乳井貢の思想——その基礎的考察」（長谷川成一 編『北奥地域史の研究』に所収、名著出版、1988年）「津軽藩士乳井貢の赤穂四十七士及び太閤秀吉批判」（『論集江戸の思想』、高崎哲学堂設立の会、1989年1月）「乳井貢の経世思想——津軽藩宝暦改革と徂徠学」（頼祺一 編『日本の近世——儒学・国学・洋学』所収、中央公論社、1993年7月）「徂徠学の实践——津軽藩の事例を中心として」（『国際基督教大学学報Ⅲ-A、アジア文化研究別冊』第7号、1997年3月）
- ⁴ このテキストの使い方は山鹿素行からの影響を受けた可能性はかなり高い。山鹿素行の著作『四書大全句読』には、「訓詁字解は尤も朱子の章句に従ふ。聖学の大義を注するに至りては、悉く程朱と牴牾す」と明記して、朱熹の訓詁に従うが、程朱と対蹠的な解釈を取ると説いている。小島康敬氏の研究（「乳井貢の思想——その基礎的考察」、長谷川成一 編『北奥地域史の研究』に所収、名著出版、1988年）に言及したように、乳井貢は日本の学者の中で、山鹿素行、荻生徂徠、太宰春台を特に尊敬している。合せて考えれば、朱熹のテキストを使いながら、朱熹の『大学』理解を批判する姿勢はやはり素行の影響を受けたのであろう。
- ⁵ 乳井貢、『大学文盲解』452頁（『乳井貢全集』巻一、乳井貢顕彰会出版、1935年6月）
- ⁶ 前掲、乳井貢、『大学文盲解』410頁
- ⁷ 前掲、乳井貢、『大学文盲解』412頁
- ⁸ 前掲、乳井貢、『大学文盲解』416頁
- ⁹ 前掲、乳井貢、『大学文盲解』412頁
- ¹⁰ 前掲、乳井貢、『大学文盲解』418頁
- ¹¹ 前掲、乳井貢、『大学文盲解』422頁
- ¹² 前掲、乳井貢、『大学文盲解』438頁
- ¹³ 前掲、乳井貢、『大学文盲解』432頁
- ¹⁴ 前掲、乳井貢、『大学文盲解』434頁
- ¹⁵ 前掲、乳井貢、『大学文盲解』437頁
- ¹⁶ 朱子学における「心性」と「格物窮理」について、島田虔次氏の『朱子学と陽明学』101-104頁（岩波書店、2014年7月、第42刷）を参考にした。
- ¹⁷ 山鹿素行、『山鹿語類』251頁（『日本思想史大系』32、岩波書店、1973年）
- ¹⁸ 荻生徂徠、『弁名』151頁（『日本思想史大系』36、岩波書店、1973年）
- ¹⁹ 山鹿素行、『山鹿語類』251頁（『日本思想史大系』32、岩波書店、1973年）
- ²⁰ 荻生徂徠、『弁名』136頁（『日本思想史大系』36、岩波書店、1973年）
- ²¹ 乳井貢、『志学幼弁』354-355頁（『乳井貢全集』、乳井貢顕彰会出版、1935年）
- ²² 山鹿素行と荻生徂徠の『大学』解釈について、以下の論文を参照にしてください。前田勉「山鹿素行——知人の学の認識論」（源了圓 編『江戸の儒学——「大学」受容の歴史』、思文閣出版、1988年）前田勉「荻生徂徠——古文辞学の認識論」（源了圓 編『江戸の儒学——「大学」受容の歴史』、思文閣出版、1988年）趙燿璋「荻生徂徠『大学解』における朱子学批判について」（『北海道大学大学院文学研究科研究論集』第15号、北海道大学文学研究科出版、2015年）
- ²³ 乳井貢、『志学幼弁』37頁（『乳井貢全集』、乳井貢顕彰会出版、1935年）
- ²⁴ 前掲、乳井貢、『志学幼弁』、39頁
- ²⁵ 乳井貢、『大学文盲解』412頁（『乳井貢全集』巻一、乳井貢顕彰会出版、1935年）
- ²⁶ 前掲、乳井貢、『大学文盲解』440頁
- ²⁷ 小島康敬、「乳井貢の思想——その基礎的考察」、433-437頁（長谷川成一 編『北奥地域史の研究』に所収、名著出版、1988年）
- ²⁸ 乳井貢、『大学文盲解』423頁（『乳井貢全集』巻一、乳井貢顕彰会出版、1935年）
- ²⁹ 乳井貢、『志学幼弁』34-35頁（『乳井貢全集』巻一、乳井貢顕彰会出版、1935年）
- ³⁰ 前掲、乳井貢、『志学幼弁』31頁
- ³¹ 前掲、乳井貢、『志学幼弁』35頁
- ³² 前節に言及したように、『大学文盲解』における「格物」に対する解釈も、同じようなことを説いている。
- ³³ 乳井貢、『志学幼弁』33-34頁（『乳井貢全集』巻一、乳井貢顕彰会出版、1935年）
- ³⁴ 前掲、乳井貢、『志学幼弁』320頁

